

## 芸術と模倣

### 芸術と模倣

#### 1

芸術とは自然の模倣である。模倣には二種類ある。一つは輪郭の模倣であり、もう一つは運動の模倣である。前者は西洋の芸術に対応し、後者は東洋の芸術に対応する。

自然を認識するとき、我々はおそらく、まず動きを認識している。そのものが、どのような輪郭をしているか、どのような色をしているか、どのような物体であるか、ということよりも、それがどちらへ向かって動いているのか、近付いているか、遠ざかっているか、という認識の方が先にあるはずである。

たとえばカエルは、動いているものしか認識できないと言われていゝる。それは当然で、動物の神経細胞を使って、ものを認識するシステムを構築しようとした場合、ものの輪郭を認識する神経回路よりも、ものの動きを認識する回路の方が、簡単に作れるはずである。前者は、どうしても複雑な回路にならざるをえない。

なぜならば、我々の神経細胞自身が、絶えず活動するものだからである。動くものによって静止したものを模倣するよりも、動くものによって動くものを模倣したほうが、効率が良いのは明らかであろう。ゆえに、我々の世界認識は、まず動きを認識するという形で行われる。

次に、ものの輪郭が認識される。

芸術が自然を模倣することであり、すなわち、我々の自然認識を模倣することであるならば、動きを表現する芸術こそが一次的なものであつて、輪郭を表現する芸術は二次的なものにすぎない。ゆえに、アニメーションは、絵画や彫刻よりもより原初的、かつ純粹な芸術であると言える。

#### 2

芸術を鑑賞するということは、芸術家の自然認識を鑑賞することである。その人が自然をどう認識しているのか、自然をどう捉えているのか、ということが表現の上に現れる。我々はそれを見て、自分では今まで気づかなかつた、自然の別の側面に気づかされる。だからこそ、新しい表現に出会うと、我々は感動する。他者の自然認識を通して、自然の本当の姿に近づけることができるからである。

深夜のテレビを見てみると、ときどき、明らかに低予算なのに、驚くほどよくできたアニメーションに出会うことがある。文字通り、アニメーターが魂を削って描いているような作品である。そういうものを見ると、目が離せなくなる。すごいものを見た、と感じる。それもやはり一つの芸術である。

ある意味で、人間の認識は自然の模倣である。我々が自然を認識するということは、我々の脳内の神経細胞が自然を認識することである。そして、異なった現象の認識には、異なった神経活動が対応する。したがって、自然現象と我々の脳の活動の間には、一対一の対応関係が存在することになる。それは、脳が自然を模倣しているということである。

では、芸術とは何か。我々の認識そのものが自然の模倣であるならば、それをさらに模倣する芸術という行為には、一体どんな意味があるのか。そして、芸術を鑑賞するとき、我々は何を見ているのか。

画家が山を描くとき、彼は、彼自身の認識を、彼の身体を使って表現しているのだろうか。彼の認識と、彼の動作との間に、どんな関係があるのだろうか。彼は、彼が見たものを正確に描き写した時に、よい画家だと言われるのだろうか。それとも、彼が見たものと彼が表現するものとの間に、何らかの関係が存在するときに、よい画家だと言われるのではないか。

我々は、芸術家の表現の中に、自然との対応関係を見出す。その対応関係が、自分自身の内側にあるものから少しずれているときに、我々はそれを面白く感じるのではないか。つまり、人間の認識は自然の模倣であるが、その仕方は、それぞれの人間で少しずつ違う。その違いを表現できるような感性と技術を持った人間が、芸術家と呼ばれるのだろうか。

ゴーギャンは、女の肌を描くときに緑色の絵の具を使う。我々はそのれを、自然で美しい表現だと思ふ。しかし、その表現の本当の意味は、彼がどのような場合に緑色の絵の具を使わないか、ということの中にある。そのような観察によって、何らかの印象が得られるような画家

こそが、芸術家と呼ばれうるのであろう。

#### 4

たとえば油絵のように、何度も何度も筆の上に筆を重ねることによって、西洋の芸術は、筆の動きを覆い隠してしまう。画家がどのように手を動かし、身体を動かして線を描いたのか、分からなくなってしまう。一方で、書は書き直しが許されない。書家が一度書いた線はそのまま残される。そのため、その線を書いたときの身体の動きが、書の上に現れるのである。

油絵を見るとき、我々は絵を見るだけだが、書画を見るときは、それ以上のものを見ているのである。

### 夫婦別姓

#### 1

日本は今でも夫婦同姓だが、夫婦別姓を認めるべきではないか、という意見が多く聞かれるようになった。

そもそも名字とは何かといえば、おそらくこれは家の名前だろう。個人の名前とは別に、親から受け継がれるものなのだから、家の名前と言ってよいと思う。そうすると、妻の名字が変わるかどうかということは、妻がどちらの家に属しているのか、という問題と深く関わることになる。

たとえば、中国では、親族のつながりが非常に強い。彼らは、遠く離れた場所で暮らしていても、一族同士で助け合うのだという。その

ため、中国社会では、親族がセーフティネットとして機能している側面もある。

そうすると、よその一族から嫁いできた女は、どちらの家族に属するのか、という問題が生じる。中国では基本的に、嫁は元の家族に属することになる。つまり、妻と夫では、属する一族が異なるわけである。なので、夫婦で財産を別々に管理することも普通で、基本的に他人同士に近い関係になる。こういう社会では、夫婦別姓が基本である。

日本の場合、嫁いできた女は、嫁いだ先の家族に属することになるので、名字が変わることになる。近代以前は女に名字がなかったのも、属する家が途中で変わるためであろう。

## 2

また、どうして中国では親族の結びつきが強いのか、という問題も興味深いものである。先述したように、個人のセーフティネットという側面もあるだろう。しかし、同郷者の集まり、という意味もあるのではないかと思われる。

中国では、様々な言語が話されている。隣の町に行くと話が通じない、ということもよくある。これは、無数の国が集まって、中国という大きな塊を作っている、と考えると分かりやすいだろう。

たとえば、広東の人間が北京へ移住すると、言葉が全く通じない。しかし、同じ広東の出身者とは、言葉が通じるわけである。そうすると、何かにつけて同郷者同士で集まる機会が多くなり、絆も強くなる。中国の大都市に行くと、必ず、各地方出身者が集まる集会所があるのだという。おそらく、親族の絆の強さは、この延長上にあるのではないか。

夫婦の名字の異同というものにも、色々な文化的歴史的背景がある。こうした習慣は、簡単に変わるものではないし、変えてよいことがあるとも限らない。難しい問題だと思う。

## 3

中国では、歴史上一度も、男女の心中という現象は起きなかったそうである。しかし、それは日清戦争以前の話で、この戦い以降、日本の文化が中国に流れ込むようになると、中国でも男女の心中がときどき起きるようになる。

岡田先生の著書によると、清国から来た留学生が一樣に驚いたことは、日本の夫婦が愛し合っていたことだという。つまり、中国では夫婦は愛し合わないのが普通なのだが、日本に来て、祖国とは全く違う夫婦の在り方を知って、カルチャーショックを受けたのである。おそらく、中国の夫婦関係は非常にドライなものなのだろう。

日本では、男らしさとか女らしさという言葉がある。これらの言葉の意味は、誰でも知っている。しかし中国には、そういうジェンダーの区別があまりない。むしろ、女の方が男らしい。中国の小説などを読むと、ヒロインが主人公の男をリードする展開が普通である。ジェンダーのギャップが小さい文化なのかもしれない。

この、ジェンダーのギャップの大きさと、男女の愛情の深さとの間に、どのような関係があるのかは明らかではない。そこに何らかの関係があると主張するつもりもない。しかし日本には、男女の情愛に関する文化が深く根づいている。日本の漫画や映画、小説、ゲームなどには、そうした文化が色濃く反映されている。日本のポルノビデオが海外で人気を博するのも、おそらく同じ理由からだろう。

それは、非常に地域的な性格の強い文化である。日本的な男女の情愛のあり方は、まったく普遍的なものではない。そして、こうした文化の成立には、日本社会の親族構造や家の構造が、深く関わっていると考えられるのである。

## 運について

### 1

ある出来事の結果として、何が起きるか分からない、予想ができない、というときに、我々は運という言葉を使う。

たとえば、コインを投げたときに、裏が出るか表が出るか、あらかじめ予想することはできない。そこで、表が出るに違いない、と思いついて、いざ裏が出たときに困るわけである。そういう人は、運に翻弄されていると言える。

しかし、表が出るか裏が出るか分からないのであれば、表が出たときにはこうする、裏が出たときにはこうする、というように、あらかじめそれぞれの場合について準備をしておけばよい。そうすれば、どちらが出ても困ることはない。こういう人は、運に翻弄されることがない。

前者のような行動パターンの人は、自分の人生は運によって決められている、と感じる。後者は、自分の人生は自分で決められる、と感じる。

### 2

欧米人はだいたい、前者のような思考しかできない。その理由はおそらく、彼らの宗教と関係しているはずである。

彼らは、人間に知りえないことであっても、その結果はあらかじめ決まっているはずだ、と考える。そして、それら未知のことをも含めて、すべてを知るものとして、神の存在を仮定する。それが決定論と呼ばれる思想である。また、どうしてかは分からないが、彼らはそれを因果律と混同している。

こうした思考の裏にあるのは、西洋人が、自己の存在と、客観的な世界とを区別しきれない、という事情だろう。彼らは、自分自身の心の中で起きる心理的な事象と、客観的な世界で生起する物理現象とを、明確に区別できていない。そのため、客観的な事象までも、ある種の心理現象として理解しようとするのである。つまり、現実の世界で起きる事象は全て、神という存在の心の中で起きる心理現象である、という風に、物理現象を解釈しなおすわけである。

それが、彼ら独特の一神教を生み、また、決定論を生む。決定論を採用する場合、未来に何が起きるかは現在の時点において決まっているので、それが予想できないということは、自分自身の落ち度である、ということになる。

このあたりの思考のプロセスは、なにか靄がかかっているようで非常に解明しにくいのだが、おおよそこのようなことだと思う。彼らは、自分はあらかじめそれを知っていなければならない、と考える。そのため、表も裏もどちらも起こりうる、と考えることに拒否感を抱く。アメリカ風の言い方をすれば、フェアではない、ということは、こういう感覚なのではないだろうか。

それは、神をだます、という感覚に近い。あるいは、神を信用しな

い、と言ったほうが正確だろうか。神様が、あらかじめどちらかに決めてくださっているのに、その賭けに乗らないのは不信心だ、ということである。正確な表現は難しいのだが、おそらくこういう感じではないか。

神の全能性は、明らかに、彼らの全能感の反映である。つまり、フェアであるということは、相手の全能性を認めるということであり、あるいは、何らかの全能者が存在することを信じるということであろう。もしくは、自分自身が全能でありうるように努力する、ということでもあろうか。そして、その全能性とは、彼の内部に生じる心理現象が、彼の外で起きる物理的な事象と完全に一致する、ということの意味している。また、神との契約ということも、おそらく同じことを意味しているはずである。

西洋人の思考パターンは非常に不合理かつ曖昧なので、彼らの思考の順序を理解することは簡単ではない。しかし、西洋人を教育するという目的のためには、これは不可欠の仕事である。

### 3

人間は自然の一部であり、それ自体が一つの物理現象である。心理的な現象は、一種の物理過程として理解されうるし、また、物理的な現象も、それを認識する精神の観点から見れば、一種の心理現象として理解されうる。しかし、基本的にはこれらは別のものであって、同一視されるべきではない。

このような観点、つまり、人間の精神は一種の物理現象である、と観じることを諸法無我と呼ぶわけである。しかし、人間の素朴な認識においては、このような理解はありえない。我々がそれを知るのには、仏の法を通してであって、仏を知らない人々には知りようがない。

キリスト教等の一神教は、やはりそのような無知から生じるものであり、広い意味でのシャーマニズムであると言える。そして、近代科学や西洋思想のほとんど全てはここに分類される。私を知る数少ない例外は、カントの超越論哲学とパースの記号論である。これらの思想には、諸法無我の芽生えが見て取れる。

### 4

偶像崇拜の禁止は、一神教の顕著な特徴である。

これまでに述べてきたことからすれば、神とは自分自身であって、自分の精神を物理的な世界に反映させる原理である。そうすると、神の像を作るということは、自分自身の像を作る、ということと等価である。

彼らはそこに、何らかの矛盾を感じ取る。ある意味では、一神教そのものの不合理を、偶像というものの中に見出してしまっている。私は神であり、私の心はこの世界そのものである。であるならば、神の姿が私の目に映るはずがない。

神の像は、私 $\parallel$ 神という等式が、実際には成立しえないことを明らかにしてしまう。そのため、彼らはそれを忌み嫌うのである。

H・P・ラヴクラフトの『アウトサイダー』という小説は、この辺りの心情を巧みに表現しているのではないだろうか。

### 5

また、とくにイスラム教に顕著なのは、言葉への執着である。それは、彼らがアリストテレスの影響を強く受けているせいでもあろう。

彼らは、客観的な存在と名辞とを、ほとんど同一視している。言葉と存在の区別がついていない。

これまでに述べたことからすれば、一神教における世界の理解は、人間の精神の理解を反映していることになる。つまり、この世界が言葉として理解されているということは、彼らが、人間の精神を言葉として理解している、ということの意味している。そして、人間の精神が言葉によって構成されているという考えは、おそらくアリストテレスの論理学の影響であろう。

それ自体は間違いではない。人間の精神に言語的な構造があるという考えには、ある程度の合理性があり、おおむね正しいだろう。しかし、それを世界の構造と同一視することは間違いである。

たしかに、我々の精神と客観的な世界との間には、何らかの対応関係が存在する。しかしそのことは、我々の精神は客観的な世界である、ということの意味するわけではない。精神と世界との間に対応関係があるからといって、必ずしも、それらが同一のものであるとは限らない。

言語が精神を反映し、精神が世界を反映しているのだとしても、それらはそれぞれ別のものである。言葉は精神ではないし、精神は世界ではない。この区別に注意することは重要である。さもなければ、あなたも一神教の泥沼にはまり込んでしまうだろう。

## 婆子焼庵

婆子焼庵という公案がある。

あるところに一人の老婆がいた。彼女は信仰心が篤く、庵に住む修行者の世話をしていた。世話を続けるうちに、彼女はその修行者が気

に入り、自分の娘と娶せようとした。だが、仏道の妨げになるということで、修行者はそれを断った。老婆は怒り、庵に火をつけて修行者ごと燃やしてしまった。

という公案である。だからどうした、という話でもあるが、少し考えてみたい。これはとんちである。とんちなので、必ず答えがある。

まず、頭を柔らかくする必要はある。公案は一種の象徴であって、そこに出てくる言葉を文字通りに捉えてはいけない。それぞれの言葉は、他の何かを象徴しているはずである。

ここでは、火が重要である。火は煩惱のたとえとしてよく使われる。ゆえに、最後に修行者が燃やされたということは、彼は煩惱にとられてしまった、ということである。しかし、修行者は結婚の誘惑を断っている。では、いったい彼はどんな煩惱に焼かれてしまったのか。

ここで注目すべきは老婆である。この話における老婆の役割は何か。老婆は、修行者を誘惑する者として現れる。だが、彼女の誘惑は一度だけだっただろうか。

誘惑の一つは分かりやすい。色欲の誘惑、あるいは、結婚という世俗的な幸福への誘惑である。しかし、もう一つの誘惑は見逃されやすい。それは、悟りという出世間の幸福への誘惑である。

そもそも、老婆はなぜ修行者の世話をしたのか。それは、悟りの功德にあずかるためである。彼女が世話をした坊主が悟りを開くことになれば、その功德の一部は彼女自身の上に帰ってくるはずである。つまり、彼女は悟りに執着している。老婆の信仰心は、幸福への執着にすぎないのである。

ここまでくると、この公案の構造が見えてくる。老婆は執着の象徴である。彼女は、娘の結婚という世間的な幸福に執着し、同時に、悟

りという出世間の幸福にも執着している。その執着の炎によって、修行者自身が焼かれてしまった。では、彼はどうするべきだったのか。彼は、女への誘惑だけでなく、悟りへの誘惑をも断ち切らねばならなかったのである。この、悟りへの執着に気付けるかどうかということが、公案の肝であろう。

よって回答例は、婆を切る、ということになるだろう。老婆は執着の象徴なので、執着を断ち切る、ということは、老婆を切る、ということである。そんな無茶な、と思う人もいるかもしれないが、これはとんちである。

悟りとは執着を捨てることなのだから、悟りに執着する限りは、悟りは開けない。そういう教訓である。

こういうふうな答えをばらしてしまうと、とたんにつまらなくなってしまう。ネタバレは私の趣味ではないのだが、しかし、あまりに関心を持ってもらえないのもつらい。これも私なりの布教活動である。

## 歴史と言葉

### 1

歴史書に書かれていることは、基本的に真実だと考えるべきである。もちろん、複数の歴史書の記述が食い違っていたり、あるいは、歴史書の記述が考古学的な資料と矛盾していたならば、真偽を疑うべき根拠となりうる。しかし、そういう証拠がない場合には、むやみに書物を疑うべきではない。

本当のことを書き残したい、という気持ちは切実なものである。自分が死んでしまったら、これを知る人は誰もいなくなってしまうかも

しれない。そう思うと、真実を書かざるをえなくなる。歴史を記述する人間が、あえて嘘をつくということは、よほどの覚悟が必要なことである。

もちろん、そのような例がないとは言えない。しかし、それを疑うべき理由がないならば、歴史書の記述は信じなければならない。

ただし、中国の歴史は別である。ナシヨナリズムでも何でもなく、日本の歴史書は信用すべきだが、中国の歴史書は信用してはならない。日本の歴史が無味乾燥でつまらないのは、事実をそのまま記しているからである。中国の歴史が面白いのは、事実を脚色して物語にしているからである。

### 2

日本における歴史の改ざんは、とくに古代史に顕著である。日本書紀の記述が信用できないものであることは、よく知られている。しかし、この時代に関しては、他に資料が乏しいので、本当のことを知ることは永遠にできないだろう。

日本書紀は故意に真実を隠している。そこに、それだけの対価を払うべき何かがあったのかどうか、我々は推測するしかない。

### 3

文字に対する感覚は、民族性が顕著に出るところである。

最近のいくつかのニュースによって、日本政府の、公文書に対する誠意のなさはよく知られることとなった。だが、それもある程度は国民性かもしれない。

日本人は、個人の利害に敏感である。とくに、自分以外の人間の利害を非常に気にする。たとえば、ここでこの文書を破棄しなければ、組織の他の人間に迷惑がかかるかもしれない、と判断すると、躊躇なく文書を捨てる。太平洋戦争終結時に大量の文書が破棄されたことも、その一例である。

一方で、特にキリスト教圏の人々は、できるだけ文書を残そうとする。彼らは、言葉というものに、個人の利害を超越した価値を見出しているのである。そのため、それを残しておく他の人の不利になる、ということが分かっている場合でも、わざと文書を残す。そのように他人の迷惑を考えないということは、個人の利益を超越した価値に従うことによって可能になる。そこでは、人間よりも、言葉の方に価値があると考えられている。

ここで、近代国家の背後にあるのが、神と人間との契約を、国家と人間との契約に置き換えた社会契約説である、ということが思い出されるべきである。公文書は、神との契約を疑似的に表現したもので、それを破棄することはタブー視される。ヨハネによれば、言葉は神である。

ここに、日本政府と欧米の政府の違いがある。日本にはキリスト教という背景がないので、欧米的な近代国家は成立しえない。日本においては、言葉よりも個人の利益が尊重される。欧米はその逆である。

では、日本政府による公文書の改ざんや破棄は、仕方がないことなのか。

そうではない。問題は、日本人ひとり一人の責任感と正義感の欠如である。それを法律でいくらは正しようとしても、いちぢごっこにしかならない。人間は常に、言葉よりも先にある。人間が法律を作るのであって、法律が人間を作るのではない。

必要なことは自省である。己の精神を反省することである。また、教育である。日本人は座禅をしなければならない。

## 全称命題と単称命題

### 1

全称命題と単称命題の区別は、現代論理学の基本である。アリストテレスは、これを厳密に区別できていなかった、という指摘があるが、それはおそらく正しいだろう。普遍と個物の関係を把握することは常に難問であり、そもそも論理学で扱いきれる問題ではない。

しかし、この区別には基本的な重要性がある。そして、哲学者や思想家といった人々に欠けているのは、この区別である。

全称命題とは、たとえば、すべての人間は死ぬ、という命題である。単称命題とは、たとえば、ソクラテスはわし鼻である、という命題である。ある集合に属する全ての個体に関する主張が全称命題であり、一つの個体に関する主張が単称命題である。

世の中には非常に不思議な議論があつて、たとえば、私には自由意志があるように感じられる、ゆえに、すべての人間には自由意志があるのだ、といった主張を行う人がいる。しかし、彼に自由意志があるということは、すべての人間に自由意志があることを意味しない。彼には、全称命題と単称命題の区別がついていないのである。

自分に関してだけ成り立つ命題を、自分以外の人間に対して無条件に適用することは誤りである。そして、すべての哲学は、この誤りの上に成り立っている。クオリアや意識の問題も、その延長線上にあるだろう。

もちろん、それが常に誤りであるわけではない。その命題が、すべての人間に適用できることを証明できる場合や、常識に照らしてそれが明らかな場合は別である。

## 2

また、証明が必要な命題と、証明が必要でない命題の区別も重要である。たとえば、すべてのカラスは黒い、という命題は証明が必要である。しかし、すべてのカラスが黒いとは限らない、という命題は証明の必要がない。なぜならば、後者には蓋然性があるからである。

先ほどの例で言えば、すべての人間には自由意志がある、という命題は証明が必要であるが、すべての人間に自由意志があるとは限らない、という命題には蓋然性がある。もちろん、ここでも常識が優先される。